「性教育」が話題になって久しいが、若い世代での「教師、学校の授業」への期待と影響を考えると、今後さらに充実した性教育が授業などを通してなされていく必要があろう。「45 歳以上」の男女差は、「月経準備教育」が女性単独に行われていた結果だろうか。

(15) 性に関する事柄を一般に何歳くらいの時に知るべきか。(○は、それぞれ1つずつ)

		3～5歳	6～9歳	10～12歳	13～15歳	16～18歳	19歳以上	個人によって異なる	知る必要はない	不明	n
男女の心と身体の違い	男性	7.9	29.9	39.0	11.7	1.3	0.0	5.6	0.7	3.9	675
	女性	10.0	33.8	39.7	8.1	0.6	0.1	3.6	0.3	3.8	897
二次性徴など身体のしくみ	男性	0.0	13.6	55.1	19.9	1.6	0.0	5.3	0.6	3.9	675
	女性	0.4	19.3	62.3	10.4	1.3	0.0	2.6	0.1	3.6	897
受精、妊娠、出産のしくみ	男性	0.7	5.9	39.4	39.1	5.3	0.1	5.3	0.6	3.4	675
	女性	1.0	8.0	43.5	35.3	5.1	0.8	2.3	0.1	3.8	897
避妊法	男性	0.0	1.6	22.7	47.6	16.7	0.6	5.6	0.6	4.6	675
	女性	0.2	1.7	21.9	53.6	14.2	0.7	4.0	0.2	3.6	897
人工妊娠中絶	男性	0.1	1.3	16.9	45.2	20.6	2.4	7.6	1.5	4.4	675
	女性	0.2	1.1	15.7	52.2	16.9	2.7	6.1	1.1	3.9	897
エイズとその予防	男性	0.4	1.9	20.9	48.9	17.3	1.3	4.6	0.4	4.1	675
	女性	0.4	1.6	22.5	52.8	15.1	0.9	3.0	0.0	3.7	897
エイズ以外の性感染症	男性	0.3	1.6	19.6	48.4	19.1	1.5	4.9	0.3	4.3	675
	女性	0.2	1.1	20.1	52.7	17.3	1.1	3.9	0.0	3.6	897
コンドームの使い方	男性	0.1	0.4	15.4	46.4	23.4	1.3	7.6	1.2	4.1	675
	女性	0.2	0.9	12.4	49.6	23.0	1.9	6.9	0.4	4.7	897
多様な性のあり方	男性	0.1	0.9	12.9	33.9	29.6	4.0	10.8	3.1	4.6	675
	女性	0.4	1.7	10.0	40.6	29.3	3.2	8.4	2.2	4.1	897
性的被害の対処法	男性	0.1	2.2	15.1	38.7	26.4	3.6	8.1	1.2	4.6	675
	女性	0.6	2.8	16.5	44.8	22.7	3.0	5.0	0.3	4.2	897
男女間の平等や助け合い	男性	1.8	13.3	26.4	30.1	14.5	2.7	6.1	0.6	4.6	675
	女性	5.1	13.5	27.5	28.1	14.7	2.8	3.8	0.1	4.3	897
結婚	男性	1.3	5.9	16.3	27.0	22.4	8.1	12.9	1.3	4.7	675
	女性	1.9	6.9	15.8	24.9	27.1	7.2	12.5	0.2	3.5	897
離婚	男性	1.2	3.7	15.9	24.6	20.9	6.4	18.5	4.1	4.7	675
	女性	0.7	6.4	15.6	23.3	23.3	5.6	17.7	3.3	4.1	897
人とのコミュニケーション	男性	8.1	14.8	26.5	21.6	13.2	1.9	8.0	0.9	4.9	675
	女性	14.5	16.7	24.3	24.2	8.4	1.9	5.4	0.2	4.5	897
性に関する倫理や道徳	男性	0.7	3.3	24.7	39.3	16.0	2.5	7.9	0.6	5.0	675
	女性	1.4	4.7	28.5	38.4	13.5	1.2	6.9	0.9	4.5	897

以下、割合が最大を示した年齢についてのみ列挙した。

「男女の心と身体の違い」(男性　10～12 歳、女性　10～12 歳)

「二次性徴など身体のしくみ」(男性　10～12 歳、女性　10～12 歳)

「受精、妊娠、出産のしくみ」(男性　10～12 歳、女性　10～12 歳)

「避妊法」(男性　13～15 歳、女性　13～15 歳)

「人工妊娠中絶」(男性　13～15 歳、女性　13～15 歳)

「エイズとその予防」(男性　13～15 歳、女性 13～15 歳)

「エイズ以外の性感染症」(男性　13～15 歳、女性 13～15 歳)

「コンドーム使い方」(男性　13～15 歳、女性 13～15 歳)

「多様な性のあり方」(男性　13～15 歳、女性 13～15 歳)

「性的被害の対処法」(男性　13～15 歳、女性 13～15 歳)

「男女間の平等や助け合い」(男性　13～15 歳、女性 13～15 歳)

「結婚」(男性　13～15 歳、女性 16～18 歳)

「離婚」（男性　13～15 歳、女性 13～18 歳）
「男女間の平等や助け合い」（男性　10～12 歳、女性 10～12 歳）
「性に関する倫理や道徳」（男性　13～15 歳、女性 13～15 歳）

【以下は子どもがいる方への質問】

（16）普段、子どもと話をしているか（○は１つ）

子どもを持つ男女ともに、若い世代ほど「よく話をする」割合が高く、年齢が上がるにつれ「時々話をする」に傾斜している。子どもの年齢を特定しないままの回答であるので、年長の子どもがいると推測される「45 歳以上」では男性の 5.4%、女性の 5.4%が「ほとんど」「まったく」話をしないとしている。

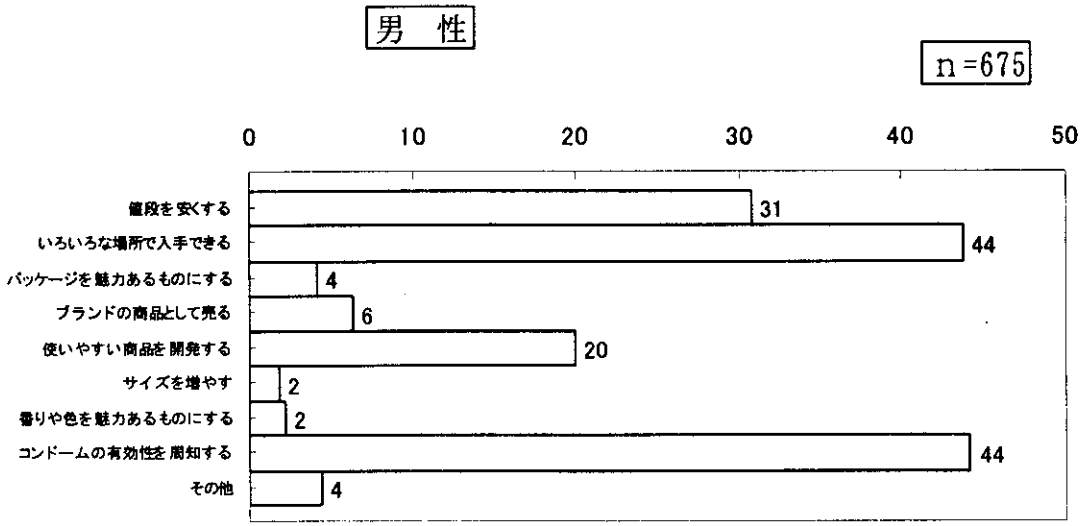
（17）子どもと性に関する話をするか（○は１つ）

自分と「親」がそうであったように、自分と「子ども」との関係においても、「性」がテーマになった途端、「ほとんど」「まったく」話をせず、男性の 77.8%、女性の 59.3%という結果であった。自分（女性）と「子ども」では、「35 歳以上」の場合、４～５割が「よく」「時々」話をすると回答しており、必要にせまられてなのか、概して高い印象を受ける。

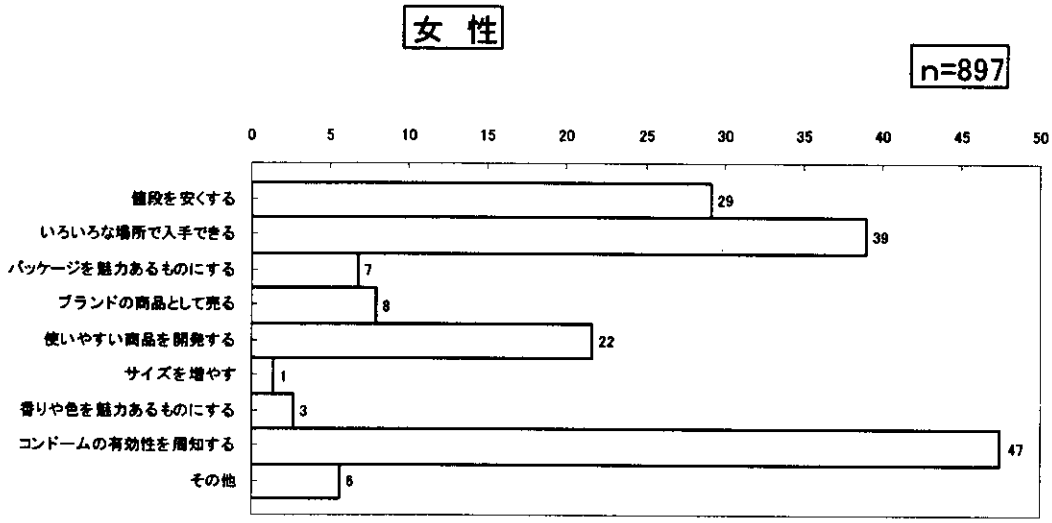
【以下は全員が回答】

（18）性感染症予防としてのコンドームの利用増の方策（○は２つまで）

男女ともに、「コンドームの有効性を周知する」（男性 44.1%、女性 47.4%）、「いろいろな場所で入手できる」（男性 43.7%、女性 39.0%）が上位を占め、次いで「値段を安くする」（男性 30.8%、女性 29.2%）、「使いやすい商品を開発する」（男性 20.0%、女性 21.6%）などを挙



げている。「値段を安くする」声は特に男女とも、「29 歳以下」で高く、「コンドームの有効性を周知する」は年齢が上がるにつれて高かった。コンドーム積極的な利用が期待される「20 歳未満」の回答に特定すると、男性では「値段を安くする」(52.4%)、「いろいろな場所で入手できる」(47.6%) で高く、女性では「値段を安くする」(49.3%)、「コンドームの有効性を周知する」(39.7%)、「いろいろな場所で入手できる」(38.4%) などとしている。男性では「コンドームの有効性を周知する」が 19.0%でしかなかったことを考慮すると、男性は「科学」よりも経費や入手のしやすさなど現実的な面が強いことが浮き彫りされた。いずれにせよ、エイズをはじめとした性感染症が拡大の一途をたどり、しかも、若い世代での問題が深刻化している今日、値段を安くし、入手しやすいという２つを満たす条件としては、「２個入りコンドーム」の開発と発売などニーズに応えた企業努力が求められることになる。自動販売機、コンビニ、学校のトイレ、ゲームセンターなど、手に入れやすい環境を考慮することも重要な課題ではないだろうか。



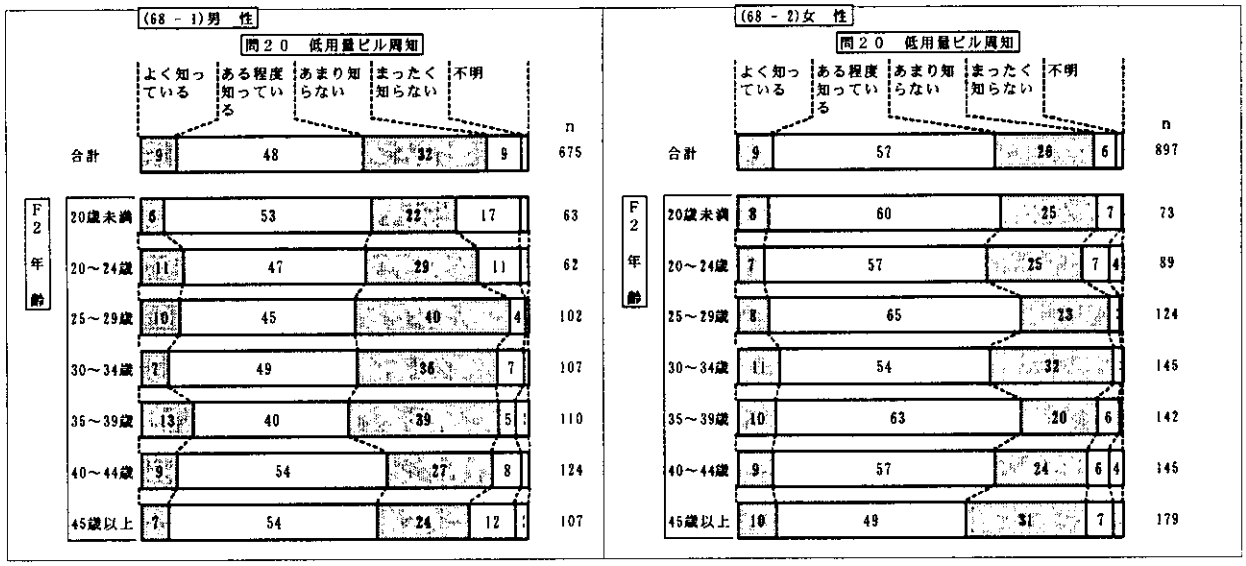
(19) 正しいコンドームの使い方（○は１つ）

「正しいコンドームの使い方」に対する認識には、人それぞれズレがあることを承知で問いかけたものである。これによれば、男性の７割が「はい」、23.8%が「一応知っている」と回答して、「いいえ」(3.9%) をはるかに凌いでいた。一方女性の方は、「はい」が 47.7%と男性に比べて低率であり、コンドーム装着に対しての男性依存の姿が見える。「いいえ」ついては、「20 歳未満」の男性 14.3%、女性では 17.8%が回答していた。教えられていなければ「わからない」のは当然であるが、性行動の低年齢化、加速化が一段と進む中、16 歳を超えた男女にとっては、コンドーム使用法を習得させることは必須ではないだろうか。

(20) 低用量ピル（経口避妊薬）の認知度（○は１つ）

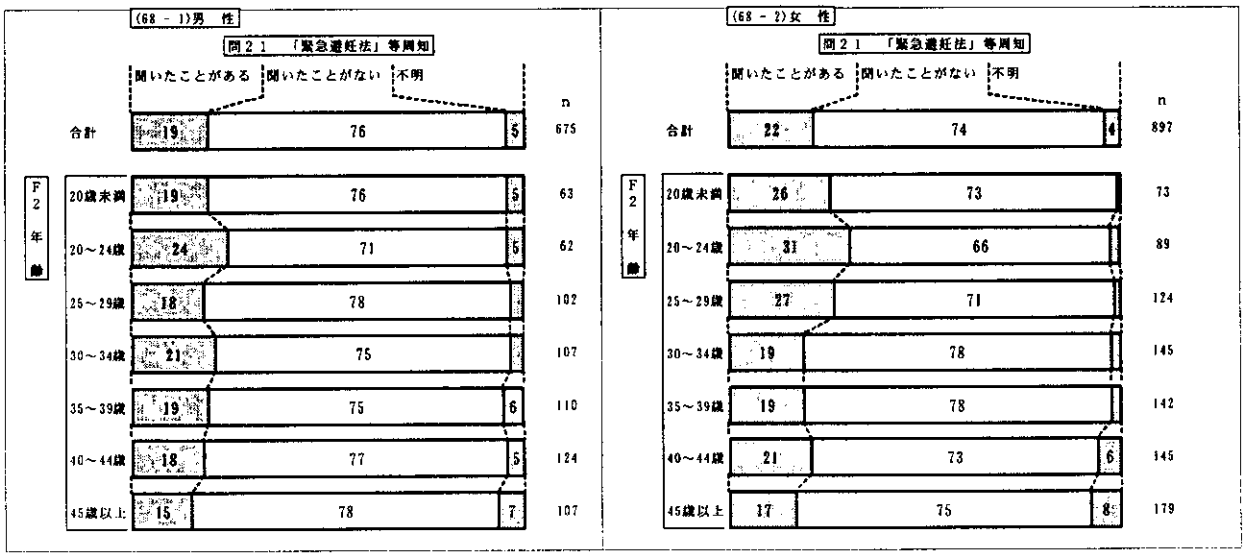
米国に遅れること40年。1999年6月に承認され、9月から発売された経口避妊薬・ピル。発売から既に3年を経過した段階での調査となったが、「よく知っている」「ある程度知っている」を加えると、男性では57.&%、女性では66.6%となっている。

毎日新聞社人口問題調査会が1996年と1998年に16歳から49歳までの女性に対して同様な調査を行っているが、96年には「よく知っている」(7.6%)、「ある程度知っている」(44.3%)、98年がそれぞれ11.1%、50.8%であったことを考慮すれば、認知度は僅かではあるが増加している。特に「あまり知らない」と「知らない」の割合が、45.5%(96年)、35.6%(98年)と比べて31.6%と減少していることがうかがえる



問21 「避妊法」「モーニングアフターピル」「性交後避妊」の認知度(○は1つ)

現在は、中用量ピルを代用しているに過ぎない緊急避妊法。(社)日本家族計画協会クリニックの呼びかけに北海道から沖縄まで1500施設が緊急避妊ピル処方施設として名乗りを



上げていてくれるとはいえ、所詮、国からの承認を受けている訳ではない緊急避妊法がどの程度認知されているのかは興味のある所であった。結果、男性の 18.7%、女性の 21.9%が「聞いたことがある」と回答している。男性が服用するわけではない緊急避妊ピルであるが、当事者となり得る「20～24 歳」(24.2%)、「30～34 歳」(20.6%) での認知度が高かった。女性では、若年層、特に「29 歳以下」で３割近くにも及んでいることが注目される。将来、認知度が更に高まり、アクセスし易い環境が整うならば、緊急避妊法を知る年齢層での人工妊娠中絶率が激減する可能性が期待される。

また、「緊急避妊法」「モーニングアフターピル」「性交後避妊」など聞き慣れない言葉をどこで聞いたかを問いかけると、男女ともに「マスコミ」(男性 62.7%、女性 67.3%)、「友だち」(男性 22.2%、女性 17.3%) などとなっており、草の根運動的に緊急避妊法がじわりじわりと認知度を高めている。中でも、「20 歳未満」の女性では 42.1%、男性の 33.3%が「学校」を挙げており、このような最新の避妊法に対しても、教師をはじめ、関心を抱いている人達が大勢いることがわかった。

あなた自身の性行動についてお聞きします

【全員の方がお答え下さい】

(22)　配偶者や恋人とのセックス（性交渉）。これまでに、セックス（性交渉）の経験のない人はイメージで（○はいくつでも）

性交に対するイメージは、男女共に「愛情の表現」が最も高く男性 76.9%、女性 77.3%、次いで「子どもをつくる」がそれぞれ 49.6%、49.9%であった。以下は、男性では「性的な快楽」46.8%、「ふれあい」47.4%、「安らぎ」28.9%と続く。女性は「ふれあい」46.0%、「性的な快楽」27.2%、「安らぎ」26.9%であり、「性的な快楽」と「ふれあい」とが逆転しており、「性的な快楽」では男女間において有意差を認めた。

これを年齢でみると、顕著な違いが浮き彫りされている。

①「愛情表現」はすべての年齢でトップであった。特に、男性の「20～24 歳」(83.9%)、「30～34 歳」(81.3%)、女性の「20～29 歳」(82.0%、85.5%)で概して高かった。

②男女比較で、各年齢で常に男性が高い項目は、「「性的な快楽」、「相手を支配するもの」、

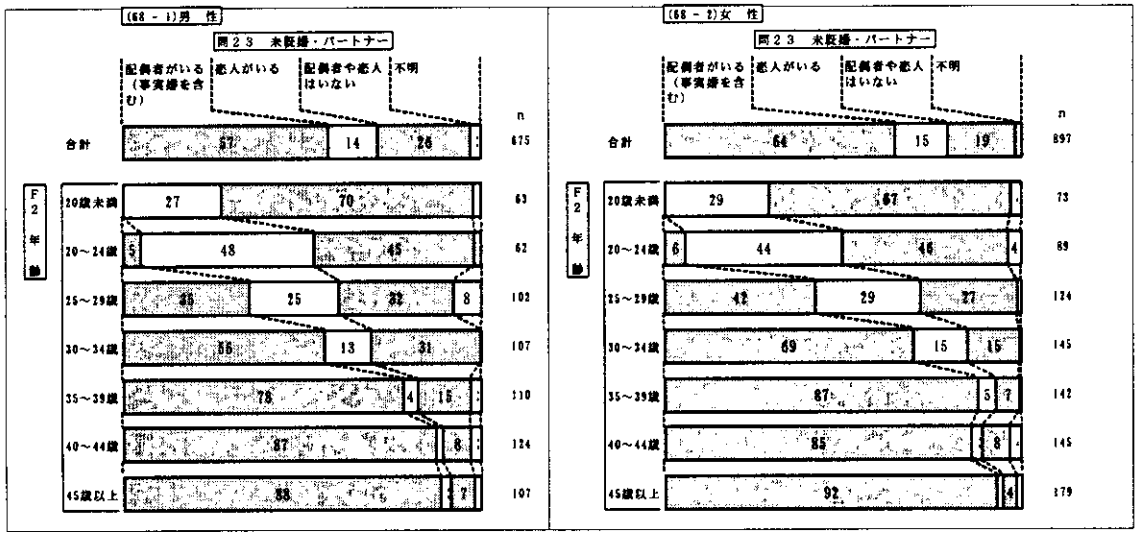
問22　配偶者や恋人とのセックス（性交渉）。これまでに、セックス（性交渉）の経験の人はイメージで（○はいくつでも）

	全体	男性								女性							
		合計	20歳未満	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45歳以上	合計	20歳未満	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45歳以上
愛情の表現	77	77	65	84	75	81	79	80	72	77	79	82	85	77	75	71	75
子どもをつくる	50	50	48	42	54	50	56	47	47	50	40	46	56	50	50	45	56
ふれあい	47	47	38	40	48	46	47	50	55	46	42	45	50	48	51	44	41
性的な快楽	36	47	40	55	43	48	45	46	52	27	16	36	28	37	27	26	20
安らぎ	28	29	29	29	26	28	32	30	28	27	19	28	32	26	32	25	24
ストレスの解消	7	9	5	13	9	7	12	11	6	5	7	3	3	8	6	3	6
義　務	4	3	0	2	2	3	3	4	5	5	3	4	2	5	6	6	6
相手を支配するもの	1	1	0	3	1	1	1	3	1	0	0	1	1	1	0	0	0
相手に服従するもの	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	1	0	1	1	0
その他	1	0	3	0	0	0	0	0	0	1	3	1	0	1	0	1	1
特にない	3	4	13	8	3	2	2	1	3	3	0	2	1	4	4	3	3
不明	4	3	5	2	2	4	3	2	4	4	4	6	5	4	1	6	4

逆に女性が高い項目は、「義務」であった。年齢での男女間のばらつきが大きいのが「ストレス解消」。また男性の「20歳未満」では他の年齢に比べて「特にない」が12.7%と高い。

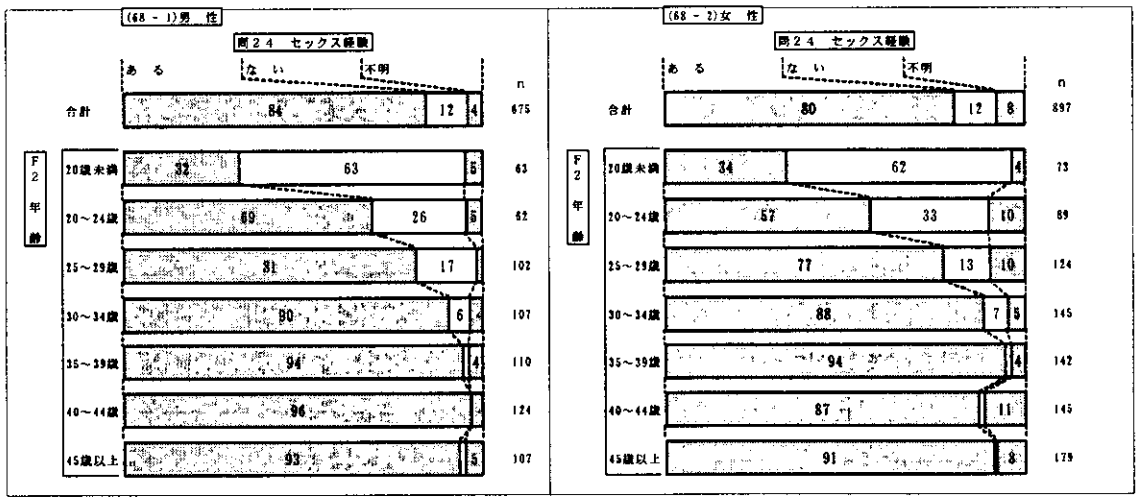
(23)現在、配偶者、恋人はいる（○は1つ）

今回の回答者のうち、男性の 57.3%、女性の 63.5%が有配偶者であった。「配偶者や恋人はいない」が男性の25.6%、女性では19.3%いるものの、その割合は「34歳以下」で高率であった。同様なことは女性でも言える。



(24) セックス（性交渉）経験（○は1つ）

性交経験者は、男性で83.9%、女性80.5%と3.4ポイント男性のほうが高いもののほぼ同程度であり、年齢でみると「20歳未満」で女性が34.2%と男性の31.7%を2.5ポイント上回っており、その他の年代では男性の方が上回っていた。これらのことは、配偶者関係（事実婚を含む）にあるものは、必然的にみて性交の経験者と捉えることができるし、恋



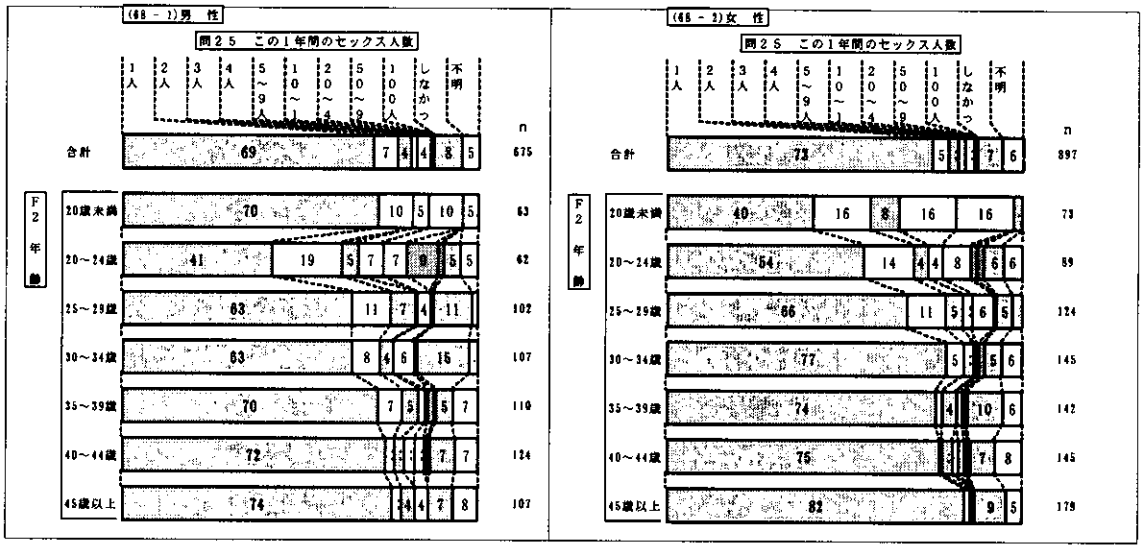
人がいる群においては性交を経験するものが多く含まれると思われる。しかし、配偶者あ

り群と恋人あり群をあわせた数値よりも全体として性交を経験している割合が高く、特に、20 歳前半までの若い群にその差が顕著に高率に示されており、若者の性行動の活発さが窺われる。

これは、(財) 日本性教育協会の性行動に関する調査や東京都の性教育研究グループが行った同様の調査と同じように、10 代女性の性行動の加速化、活発化の傾向を裏付けていた。

(25) この1年間のセックス (性交渉) 人数 (○は1つ)

性交経験者のうちで過去1年間のセックスパートナーの数についてみると、男性では「1人」が全体で 67.0%、「2～4 人」が 13.3%、「5 人以上」が 6.2%であり、複数のパートナーを持っていたのが 19.5%であった。年齢でみると「20～24 歳」で「2～4 人」が 30.2%、「5 人以上」18.6%と計 48.8%が複数のパートナーを持っており、他の年齢層をはるかに凌いでいた。2人以上と関係を有していた男性は「25～29 歳」で 24.1%、「30～34 歳」19.6%となっていた。



一方女性では、「1 人」が 73.4%、「2～4 人」10.0%、「5 人以上」4.0%であり複数のパートナーを持っている女性は、14.0%であり男性に比べ明らかに少ない。しかしながら、年齢をみると「20 歳未満」で「2～4 人」が 40.0%、「5 人以上」が 16.0%で合計 56.0%は「20～24 歳」の男性より複数を相手にしている割合が多かった。次に、「2 人以上」が「20～24 歳」で 33.4%、「25～29 歳」26.3%、「30～34 歳」11.7%、「35～39 歳」9.0%、「40 歳以上」4.8%と続いていた。

これを配偶者のみでみると、既婚男性での複数の性交相手は 7.4%であり「40～44 歳」10.3%、「45～49 歳」9.8%とその割合が高くなっていた。また配偶者のいない未婚男性のうち複数の性交相手がいる者は 45.0%であり、年代別では 30 歳後半が 63.2%と最も高く、次いで 30 歳前半 48.7%、40 歳前半 45.5%となっている。既婚女性では 6.7%であり、「25～29 歳」が最も多く 16.7%となっていた。未婚女性で全体では 36.9%で、40 歳前半 62.5%、10 歳代 56.0%、20 歳前半 36.2%、20 歳後半 34.8%と続いていた。この 40 歳前半に高率

にみられたのは対象例が 8 例と少ないための偏りと考えるが、女性の若い年代ほど複数の相手を持っていることになる。

これらを分析すると、男性は 30 歳代から性的アクティビティーが高くなり、既婚男性でも複数の相手との性的関係を 10%前後は持つとみられ、未婚男性でも半数近くが複数のパートナーを持っていることが示された。一方、女性においては、既婚女性の 20 歳後半が複数のパートナー有していたが、未婚から既婚への移行期として高くなっている可能性が示唆される。それを証明するものとして、未婚女性で複数者と性的関係を持つの者が 10 歳代から 20 歳代が高く、性的アクティビティーが高いものと考えられるからであり、また、5 人以上との関係をもつ者も 10%近くあった。しかも 25 歳未満に多いことから性風俗に従事しているものが少なからず含まれていると考えられる。

過去 1 年間セックスがなかったものは、男性で 8.1%とあるが、既婚男性では 3.7%であり、30 歳前半 3.4%、後半 2.4%、40 歳前半 4.7%、後半 5.4%であった。一方女性は 7.1%であり、既婚女性の全体では 6.8%で、30 歳前半 3.1%、後半 9.1%、40 歳前半 6.8%、後半 8.4%であり、これらをセックスレスとして考えるなら 40 歳を越えると 5～10%は存在するものと考えられる。

初めてのセックス（性交渉）について

(26) 最初にセックス（性交渉）をしたのは何歳の時ですか。

初交時の年齢についてみると、全体の平均では、男性 476 名 18.9±3.1（11～42 歳）、女性 598 名 19.7±3.2（12～35 歳）と男性が 0.8 歳早くなっている。これを年齢でみると 10 歳代の男性は 19 名で 16.4±1.3（14～19 歳）であり、女性 25 名 15.9±1.3（13～18）歳と女性が 0.5 歳下回っていた。20 歳前半では、男性 42 名　17.7±2.1（14～23 歳）、女性 46 名 18.1±1.9（13～23 歳）と男性が 0.4 歳下回っていた。

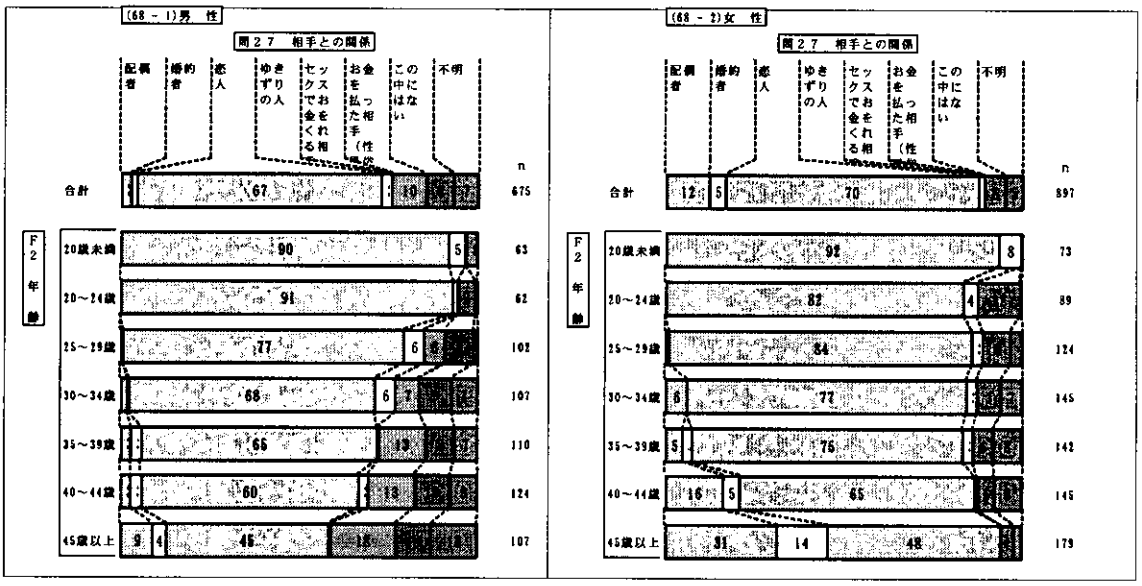
男性	20 歳未満	19 例	16.4±1.3（14-19 歳）	女性	20 歳未満	25 例	15.9±1.3（13-18 歳）
男性	20-24 歳代	42 例	17.7±2.1（14-23 歳）	女性	20-24 歳代	46 例	18.1±1.9（13-23 歳）
男性	25-29 歳代	76 例	17.7±2.6（11-26 歳）	女性	25-29 歳代	81 例	18.5±2.3（13-26 歳）
男性	30-4 歳代	80 例	18.7±2.7（13-28 歳）	女性	30-34 歳代	103 例	19.8±3.5（12-32 歳）
男性	35-39 歳代	81 例	18.9±2.9（12-32 歳）	女性	35-39 歳代	110 例	19.7±3.0（15-29 歳）
男性	40-44 歳代	103 例	20.1±3.8（14-42 歳）	女性	40-44 歳代	94 例	20.1±2.7（14-28 歳）
男性	45 歳以上	75 例	19.9±2.7（15-29 歳）	女性	45 歳以上	139 例	21.5±3.2（15-35 歳）
男性	計	476 例	18.9±3.1（11-42 歳）	女性	計	598 例	19.7±3.2（0-35 歳）

20 歳後半では、76 名 17.7±2.6（11～26 歳）、女性 81 名 18.5±2.3（13～26 歳）、30 歳前半男性、80 名 18.7±2.7（13～28 歳）、女性 103 名 19.8±3.5（12～32 歳）、30 歳後半男

性、81 名 18.9±2.9（12～32 歳）、女性 110 名 19.7±3.0（15～29 歳）、40 歳前半男性 103 名 20.1±3.8（14～42 歳）、女性 94 名 20.1±2.7（14～28 歳）、45 歳以上男性、75 名 19.9 ±2.7（15～29 歳）、女性 139 名 21.5±3.2（15～35 歳）と 20 歳以上では総じて男性の方が初交年齢の早いことが明らかであった。年代が若くなるにつれ有意に初交年齢が低年齢化していることが明らかにされた。

（27）初めてセックス（性交渉）をした相手との関係（○は１つ）

次に初交の相手との関係についてみると、恋人関係が男女共に高く男性で 65.4%、女性 69.8%、特に「25 歳未満」の男女では 82.4～92.0%と高値を示していた。その他として男性では「性風俗」が 20 歳後半からみられ、加齢と共に増えている。また、初交の相手が配偶者については、男性全体で 3.4%と女性に比べ有意に少ないものの高齢になるにつれ、その値は上昇していた。「行きずりの相手」は 10 歳代、20 歳前半では女性より低いものの、20 歳後半から 30 歳前半で女性を逆転していた。女性の若い世代では「行きずり」や「この中にない」が多く、年代を重ねるにつれ、婚約者や配偶者が増えている。また、「セックスでお金をくれる」という援助交際に当たるようなケースは、初交の相手としては皆無であった。



（28）　初めてセックス（性交渉）した相手と、出会ってからセックス（性交渉）するまでの期間

初交に至った際の相手との出会いからの期間について調べているが、男性は「１ヶ月未満」が最も高く 19.1%、次に「３ヶ月未満」18.6%、「６ヶ月未満」14.1%、「出会ったその日」12.2%と続いていたが、出会いから初交までに３ヶ月未満が全体の 54.3%を占めている。しかも、若い年代においてその割合が 20 歳前半で 69.8%、20 歳後半 75.8%と高いことがわかった。

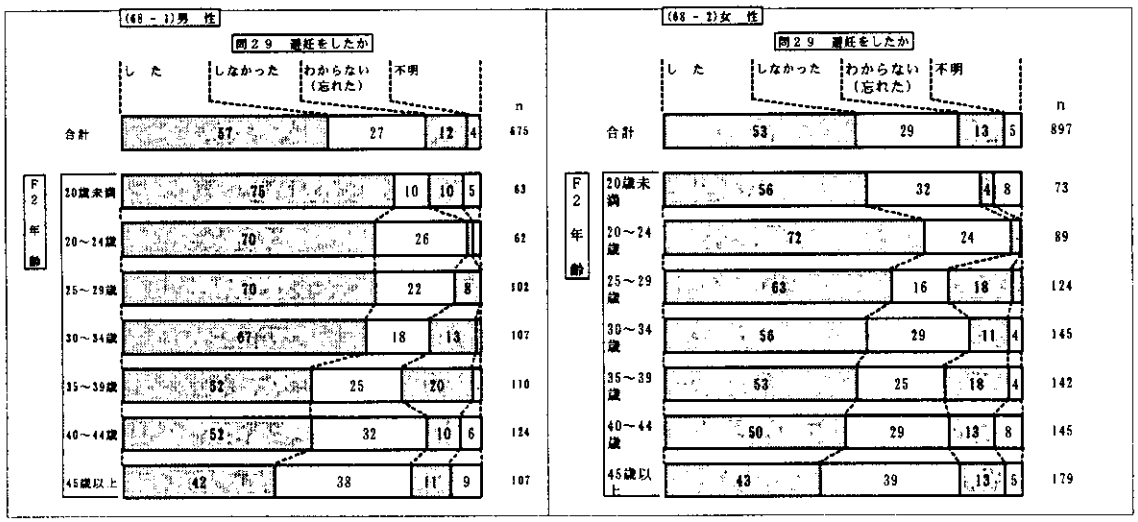
一方、女性は「3ヶ月未満」が 23.7%と最も高く、「1 年未満」19.0%、「6ヶ月未満」16.5%、「1 ヶ月未満」13.9%と続き、「出会ったその日」は 2.6%と有意に少なかった。男性に比べ初交に至る期間が長くなっていることが窺われた。「3ヶ月未満」までは全体で 43.4%であるが、10 歳代では 80.0%、20 歳前半で 62.7%、20 歳後半で 58.9%であり、40 歳代以上の 31%と大きく異なっていた。すなわち男性は時に早く性行動を取り、女性は待ち受けての性行動という図式が窺われた。しかし、出会ってからセックスに至るまでの期間が男女共に早くなっていることが明らかとなった。

(29) 初めてのセックス（性交渉）の時の避妊実行（○は1つ）

初交の際の避妊の有無については、男性で「避妊をした」が 57.6%、女性で 53.6%と女性にやや低い値であったが有意な差ではなかった。「避妊をした」の中で男性が 10 歳代 75.0%、20 歳前半 69.8%、20 歳後半 69.9%と若い年代で高く、年代が高くなるにつれ低くなっていた。女性も 20 歳前半 72.5%、20 歳後半 63.2%と高く、年代が高くなるにつれ低くなっていた。「避妊をしなかった」とはっきり答えているのが 40 歳以上高年代男性で 32.9%、女性で 31.2%もみられていることから考えて、その初交関係が、配偶者が多いためではないかと考える。また、女性は全体で「避妊をしなかった」と答えているのは、初交相手が配偶者・婚約者・恋人関係であって、相手の子どもをという意識も少なからず介在しているのではないかと考える。

初交時に「避妊をした」男性の平均年齢は 19.1±2.6 歳(n=295)、女性では 19.7±3.0 歳(n=333)で女性において有意($p<0.01$)に年齢が高かった。また、「避妊をしなかった」は男性 18.7±3.9 歳(n=132)、女性 20.1±3.7 歳(n=185)であり同様に女性が有意($p<0.01$)に高齢であった。「分からない」は男性 17.9±2.4 歳(n=44)、女性 19.2±2.5 歳(n=71)と男性が若いも有意な差は認められなかった。

さらに、避妊した群と非避妊群において相手との関係性をみると、配偶者の場合は、男性で「避妊した」42.1%、「避妊しなかった」52.6%、女性は、35.6%、48.3%と共に避妊



をしていない方が多かった。婚約者関係では、男性 25.0%、33.3%、女性 60.6%、24.2%と女性の方に避妊群が多かった。恋人関係では、男性 63.5%、24.3%、女性 59.7%、25.4%といずれも避妊群が高かった。行きずり関係では、男性 44.4%、38.9%、女性 50.0%、50.0%であった。男性での風俗関係では、69.5%、23.7%と避妊をしたと答えたのが最も高値を示していた。すなわちこれは次に述べる避妊法の実態からみて STD 予防の意味でコンドームを使用していたものと考える。配偶者関係では避妊の必要性が低いためで、婚約者関係では女性より男性の方に避妊意識の低いことが示されて、未だ婚姻関係にない未婚の性としての考えも窺われた。恋人関係では、避妊群が男女共に全体の平均よりも上回っており、避妊意識は高かった。

(29-1) 使った避妊法 (○は2つまで)

初交時の避妊法は、男女共に「コンドーム」が多く、男性 93.3%、女性 89.9%であり、それ以外の避妊法としては「膣外射精法」が男性で 5.8%、女性 9.8%と 10%を下回っていた。このことは、初交に至る際の避妊について、コンドームが直ぐに使える状態でなければ避妊は成り立たないのではないかとも思われる。

F1 性別:男性

		全体	問29-1 使った避妊法								
			男性用コンドーム	女性用コンドーム	膣外射精(性交中絶法)	洗浄法	飲む避妊薬(ピル)	オギノ式避妊法	基礎体温法	この中にはない	不明
合計		100.0	93.3	0.3	5.8	0.3	0.3	0.3	1.2	0.0	0.0
F2 年齢	20歳未満	100.0	93.3	0.0	6.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	20~24歳	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	25~29歳	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7	0.0	0.0
	30~34歳	100.0	95.4	0.0	3.1	0.0	0.0	1.5	0.0	0.0	0.0
	35~39歳	100.0	88.9	0.0	9.3	1.9	0.0	0.0	3.7	0.0	0.0
	40~44歳	100.0	85.5	1.6	14.5	0.0	1.6	0.0	0.0	0.0	0.0
	45歳以上	100.0	92.9	0.0	4.8	0.0	0.0	0.0	2.4	0.0	0.0

F1 性別:女性

		全体	問29-1 使った避妊法								
			男性用コンドーム	女性用コンドーム	膣外射精(性交中絶法)	洗浄法	飲む避妊薬(ピル)	オギノ式避妊法	基礎体温法	この中にはない	不明
合計		100.0	89.9	0.0	9.8	0.5	0.0	0.5	0.5	1.3	0.3
F2 年齢	20歳未満	100.0	92.9	0.0	7.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	20~24歳	100.0	97.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.7
	25~29歳	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	30~34歳	100.0	90.3	0.0	6.9	1.4	0.0	0.0	0.0	2.8	0.0
	35~39歳	100.0	78.9	0.0	23.9	0.0	0.0	1.4	1.4	1.4	0.0
	40~44歳	100.0	83.9	0.0	14.5	0.0	0.0	1.6	0.0	3.2	0.0
	45歳以上	100.0	93.0	0.0	8.5	1.4	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0

(29-2) その時、避妊しなかった理由（○は１つ）

初交の際に避妊ができなかった理由についてみると、男性では「避妊具がなかった」が36.7％と最も多く、次に「妊娠しないと思った」15.3％、「面倒だった」が14.7％と続いていた。この「避妊具がなかった」は各年代間においても共通した理由の多くであった。なお、「面倒だった」は20歳前半までは最高位を占めていた。

女性の避妊しなかった理由としては、「自分から避妊を言い出せなかった」が最も多く24.3％で、年代別では30歳前半、40歳前半が35％以上であった。「避妊具がなかった」19.4％であり25歳未満で5割を占めていた。彼らの初交が衝動的であったようにも窺われる。「妊娠しないと思った」17.0％、20歳後半と30歳後半が30％以上であった。オギノ式での安全日と捉えていたと思われる。「子どもが欲しかった」16.5％で40歳前半21.6％、後半32.8％と平均を上回っており、配偶者関係と一致していたと考える。

男性では「避妊をしなかった」理由の多くは「コンドームがなかった」という言葉に置き換えることができ、また、「コンドームを付けるのが面倒だった」ともいえよう。女性は「コンドームを付けてと言い出せなかった」のであり、例えそれがいえたにしても「コンドームが手元になかった」ために避妊ができなかったといえよう。さらに「オギノ式」での避妊実行者は男女共に1％以下であったことと合わせて「妊娠しないと思った」という避妊未実行者から「オギノ式」は初交時においては避妊という視点で、特に男性は捉えていないように思われる。これらから、男性においては避妊という意識があってもコンドームが常に手元にあり、面倒という意識が変わるなら避妊の実行率は高まるものと考えられる。一方、女性は自ら確実に避妊ができるピルなどといった女性主導型の避妊法を視野に入れておかなければ望まない妊娠のリスクに曝されることになると思われる。

初交時に避妊をしなかった女性での平均年齢をみると全体では20.1±3.7歳(n=185)であったが、個々の理由から見ると「自分から避妊を言い出せなかった」は18.8±1.9歳(n=45)、「避妊具がなかった」18.0±2.7歳(n=37)と平均を下回っており、「子どもが欲しかった」24.4±3.1歳(n=30)、「妊娠しないと思った」19.9±3.1歳(n=29)と平均を上回っていた。「子どもが欲しかった」のが最も初交年齢が高く、他の群より有意差を認めている。次いで「妊娠しないと思った」、そして「自分から言い出せなかった」、「避妊具がなかった」の順であった。若い女性における初交時には、自ら避妊をするという意識下においてピルなどの情報をしっかりと認識しておく必要性が感じられた。

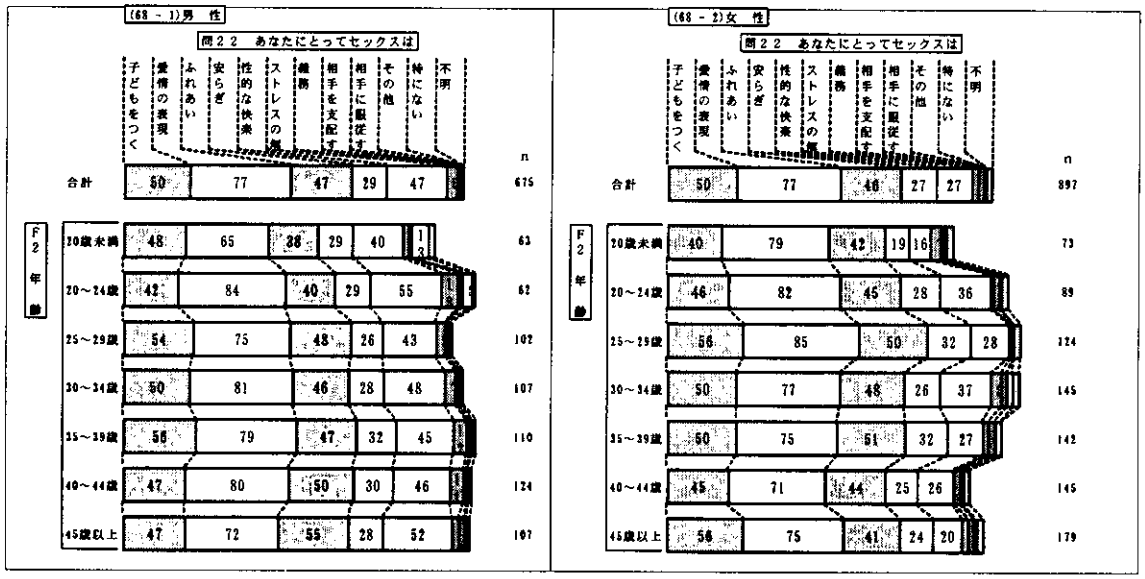
「自分から避妊を言い出せなかった」	18.8±1.9歳(n=45)	P<0.05
「避妊具がなかった」	18.0±2.7歳(n=37)	P<0.001
「子どもが欲しかった」	24.4±3.1歳(n=30)	P<0.001
「妊娠しないと思った」	19.9±3.1歳(n=29)	P<0.001

【全員に】

(30) 初めてセックス（性交渉）後の気持ち（○は１つ）

初交時に至った際の気持ちを尋ねると、男性で「いとおしく思った」32.9%、「うれしかった」29.0%であった。年代別では 25 歳未満と 35 歳以降では「いとおしく思った」が上回っていたが、25 歳から 30 歳前半において「うれしかった」が多くなっていた。

女性では「いとおしく思った」25.8%、「苦痛だった」17.7%、「うれしかった」16.1%と続いており、女性において受身の性であったことが示されている。それを年代別でみると、10 歳代の約半数は「うれしかった」と他の年代よりも有意に高値であり、10 歳代の若い世代では早く経験をしたいという意識の現われがでているものと考える。また、30 歳前半では「何も感じなかった」が 13.3%と他の世代よりも倍近い高値であり、さらに「苦痛であった」との回答が、年代が高くなるにつれ高値を示していることは、受身の性として強く捉えられているようにも考えられる。



現在の避妊の状況

(31) 避妊やその方法について、相手とよく相談して決めているか（○は１つ）

避妊をテーマに、男女間のコミュニケーションを問いかけると、男性では「余り相談していない」が 39.6%と最多であり、「よく相談している」37.8%、「まったく相談していない」17.1%であった。女性についてはそれぞれ 37.4%、46.1%、10.9%であり、男性に比して「よく相談している」割合が高いが、男女間の認識ギャップが生まれている。これを年齢でみても、大きな差異が認められない。

(32) この１年間の避妊（○は１つ）

この 1 年間の避妊法について、「いつも避妊をしている」は男性で 42.2%、女性 47.9%と女性の方が、避妊実行率が有意($p<0.05$)に高かった。「避妊をしたり、しなかったり」は

男性 24.0%、女性 19.9%。「避妊はしない」男性 15.4%、女性 14.5%となっている。これを年齢でみると、男女差の著しいのが、「いつも避妊している」の「20 歳未満」の結果である。もちろん、同年齢層同士の性行為がなされているとは限らないので、単純な比較はできないが「いつも避妊している」と回答した男性は 65.0%、女性は 28.0%であった。「避妊はしない」の回答は、男性の 30 歳後半で 24.0%、女性の 30 歳前半 21.1%、20 歳後半 20.0%と高値を示していた。これは、妊娠を意図しているためと考えられる。

(32-1) 避妊しない理由（○は２つまで）

避妊をしない理由として、男性では「子どもが欲しい」が 27.8%と最も高く、次いで「面倒だ」が 25.6%、「妊娠しないと思う」25.1%、「避妊具がない」16.1%と続いていた。女性では、「妊娠しないと思う」38.2%、「子どもが欲しい」25.3%、「面倒だ」14.1%と続いており、「妊娠しないと思う」は女性のほうに有意($p<0.05$)に高く、「面倒だ」は男性に有意($p<0.05$)に高いことが示されていた。年代別についてみると男性では「子どもが欲しい」が 20 歳後半から 30 歳代に高く、女性では 30 歳代に集中していた。「妊娠しないと思う」は男女共に 40 歳以上に高くなっているが、10 歳代女性も 4 割が答えていた。また、10 歳代女性では「面倒だ」と答えるのが 46.7%と最も高値を示していた。これは性交により妊娠するかもしれないという認識の欠如性が窺われる。

特に 10 歳代の女性は既婚者が対象に入っていないにもかかわらず初交年齢は 15 歳台と低年齢化し、しかも性的パートナー数も多く、避妊に対しても比較的安易な考えを持っているものが多く、望まない妊娠のハイリスクグループであることがより明らかとなった。

(32-2) 現在の主な避妊方法（○は２つまで）

現在の主な避妊法について、男性では「男性用コンドーム」が 74.9%と最も高く、次いで「膣外射精法」13.1%、「オギノ式」4.0%、「基礎体温法」1.6%の順であり、「ピル」は皆無であった。これは初交時の避妊法と殆ど同じであるも、膣外射精法が初交時よりも多くなっていた。年代別でみて特に大きな変化としては 40 歳前半の避妊法として「膣外射精法」を行っているのが 24.1%と比較的多くなっていた。男性が考えられる避妊法にはコンドームしかないとの結果が浮き彫りされた。

女性の避妊法も同様に「男性用コンドーム」が主流で 70.8%、「膣外射精法」15.1%、「基礎体温法」4.3%、「オギノ式」3.7%、「IUD」1.2%、「ピル」1.0%。ピルについては男性の答えが皆無であったことから、ピルが使用されていることについて、必ずしも相手に伝えていないことも考えられる。また、「女性用コンドーム」はわずか 3 名で 0.6%に過ぎなかった。女性が主体的に取り組める避妊法としては「女性用コンドーム」「低用量ピル」「銅付加 IUD」などがあり、1999 年後半から 2000 年にかけて承認され使えるようになってきたにもかかわらず、男性主導型の避妊法が選択の傾向を変えることができないのは遺憾である。

毎日新聞社人口問題調査会は1952年以来、２年ごとに「全国家族計画世論調査」を実施

本調査結果と毎日新聞社人口問題調査会調査との比較

		現在実行している人を対象に（既婚女性）						現在と前に実行している人を対象に（既婚女性）				
	今回	25回	24回	23回	22回	21回	20回	19回	15回	10回	5回	1回
	2002	2000	1998	1996	1994	1992	1990	1988	1980	1970	1960	1952
コンドーム（男性用）	69.1	75.3	77.8	77.2	77.7	75.3	73.9	76.8	81.1	68.1	58.3	35.6
性交中絶／膣外射精	17.3	26.6	7.4	9.6	7.1	7.6	6.5	4.9	5.2	6.9	11.5	12.7
オギノ式定期禁欲法	4.7	6.5	8.4	8.1	7.1	9.2	7.3	6.6	23.1	33.9	40.4	27.4
女性不妊手術	3.1	5.3	4.6	5.3	5.8	5	7.4	5.8	2.9	-	5.4	-
基礎体温法	2.8	9.8	8.2	8.9	6.8	7.3	8	9.7	—		6.1	—
ＩＵＤ	1.7	2.7	3.1	3.8	3.7	4.9	4.7	5.3	8.3	7.2	-	-
洗浄法	0.8	0.4	1.1	0.5	0.5	0.9	1.2	0.6	1.6	1	2.1	4.9
コンドーム（女性用）	0.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ピル	0.6	1.5	1.1	1.3	0.6	1.3	1	1.7	3.2	1.7	-	-
男性不妊手術	0.3	1.1	1.2	1.2	1.2	1.2	2.4	1.6	1.1	-	0.9	-
避妊薬（錠剤／ゼリー／フィルム）	0.0	0.5	0.8	0.5	0.8	1.2	1	0.5	-	-	-	-
無回答		2.4	2.6	2.6	3.1	2.2	2.5	2.7	1.2	-	4.2	10.7
ペッサリー	-	-	-	-	0.2	0.1	0.3	0	1.1	4.3	7.4	7.8
ゼリー、フィルム	-	-	-	-	-	-	-	-	1.9	6.4	13.3	15.4
錠剤	-	-	-	-	-	-	-	-	2.3	7.8	7.2	14.2
スポンジ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.3	1.5	—
その他（無回答）	10.9	-	-	-	-	-	-	-	1.2	3.8	1.1	4.3
不妊手術	*3.4	*6.4	*5.8	*6.5	*7.0	*6.2	*9.8	*7.4	*4.0	5.4	-	-

*は再掲　　全国家族計画世論調査集計結果（毎日新聞社人口問題調査会）

しているが、その結果と本調査とを比較してみよう。毎日新聞社調査では、16歳から49歳の「既婚女性」のうち、「現在避妊を実行している」人の避妊法選択を聞いているので、本調査でも既婚女性に絞ってデータをまとめたのが表である。それによれば、第25回（2000年）では75.3%であった「コンドーム（男性用」が今回は69.1%と減少傾向を示している。1999年9月にはピルが、2000年1月には銅付加子宮内避妊具が、4月には女性用コンドームが続々と発売されたこともあり、3年近く経過した時点での動向が注目された。ピルについては僅か0.6%で2000年に比べ0.4ポイント減、ＩＵＤも1.7%で1ポイント減、今回初めての調査となった女性用コンドームは0.6%が使用していた。わが国にあっては、世界で広く用いられている女性が主体的に取り組める近代的避妊法に対する選択意志が極めて低率であることは、従来とまったく変わってない。

（32-付問1）コンドームを使っている理由（○は２つ）

男女ともに「確実な避妊法だと思う」（男性 63.3%、女性 54.0%）がトップ、次いで「どこでも手に入りやすい」（男性22.8%、女性20.3%）、「性感染症予防のため」（男性19.9%、女性 14.3%）という結果であった。注目すべきは、男性の場合「20歳未満」では「性感染症予防ができる」と考えている者が５割を占めているだけでなく「どこでも手に入れやすい」と入手の容易さを回答した者が55.6%と他の年齢層をはるかに凌いでいるのは興味深い。性感染症の拡大が、予防の低い若年の性行動が原因しているかのように論じられることが

少なくないが、コンドームを性感染症予防の用具としてきちんと位置づけているのは、年長者よりもむしろ若者であったというのは興味深い。中でも「40 歳以上」の男性ではその意識が 10%程度にまで減少している。問 27 ではこの一年間に「お金を払った相手（性風俗など)」がいる男性は、「45 歳以上」が 18.0%と最も高く、「35～44 歳」でも 12,3%もいることが問題なっているにもかかわらず、コンドームを性感染症予防として使用する意識が低いことを考慮すると、性感染症の拡大に、高齢男性こそ危険因子である可能性を否定できない。

避妊効果を科学的に評価する我々にとっては、コンドームを確実な避妊法とは言い難いものがあるが、男性も、女性も、高齢になるほど「確実な避妊法」という意識が高く、コンドームがこの世代にどれほど長い間支持されてきたかを示唆する結果となっている。

(33) コンドームを使わない理由（○は２つ）

わが国にあってコンドームを使わない男女は僅かのグループに過ぎないが、「コンドームを使わない理由」を質問すると、男性では「使わない方が気持ちいい」が第一位で 24.3%、次いで「面倒だ」(19.9%)、「妊娠を希望している」(17.1%) となっている。女性では「妊娠を希望している」が 22.9%でトップ、「使わないほうが気持ちいい」10.1%と続く。年齢で見ると、女性の場合「25～39 歳」、男性では「20～29 歳」と「30～34 歳」で、「妊娠を希望している」からコンドームを使わない回答している。回答数は少ないとはいえ、「コンドームを使わない方が気持ちいい」と回答したのが女性「20 歳未満」(30.0%)、男性「20～24 歳」の 62.5%であることは注目に値する。

望まない妊娠の防止についてお聞きします。

【全員の方】

(34) 低用量ピルを使いたいか、または相手に使ってほしいか（○は１つ）

低用量ピルが使用されるようになって以来 3 年が経過しようとしているが、今回の調査では低用量ピルの使用率がわずか 1.0%にしか過ぎなかった。毎日新聞社人口問題調査会が 2000 年に行った調査では、ピル服用者は既婚女性の 1.5%、未婚女性で 2.7%であることを考慮すれば、それよりも使用率は低下を示していたということであった。この理由について以下に検討する。

今回の調査で「低用量ピルの使用意向」についての設問があり、これによると「既に使用している」は男性ではもちろん相手の女性が使用しているという意味であるが 0.4%、女性 1.6%、「現在使っていないが、是非使いたい」は、男性 13.8%、女性 13.3%、「今の状況では使えない」5.8%と 6.2%、「使いたくない」70.5%と 71.8%と男女間で殆ど同じ割合であった。前述した現在の避妊法でピルを使用している女性が 1.0%であったこととの違いは、副効用のための使用で 1.6%と高くなっているものと推察できる。また、女性よりも

男性がピル使用の認識に 0.4％と少ないのは、相手女性がそのことを伝えていなかったからではないか。

2000 年に行った毎日新聞社人口問題調査会が実施した「第 25 回全国家族計画世論調査」でも同様の調査が行われているが、これによると「現在使っている」が未婚女性 0.7％、既婚女性 1.9％、「現在使っていないが、是非使いたい」既婚 3.1％、未婚 1.4％、「今の状況では使えない」5.9％と 3.2％、「使いたくない」52.2％と 72.9％、「分からない」が 35.5％と 19.1％となっていた。現在使用している女性はほぼ同率であり、発売から 3 年間でのピルに対する強い使用意向が認められない。ただし、「是非使用したい」は、10 ポイント近く上昇しており、特に女性のうち「24 歳以下」が（19.2%～24.7%）と考えている。

（34-1,2）低用量ピルを「使いたい」あるいは「使いたくない」理由（○は２つまで）

低用量ピル使用の理由として、男性は「セックスの際に避妊を意識しなくて済む」44.8％、「避妊効果が高い」32.3％、「女性自身の意思で使うことができる」31.3％、「人工妊娠中絶をしなくて済む」21.9％、「手軽に使える」9,4％の順であったが、女性は「避妊効果が高い」43.6％、「女性自身の意思で使うことができる」30.8％、「セックスの際に避妊を意識しなくて済む」28.6％、「手軽に使える」15.8％、「月経痛の緩和などの副効用がある」15.0％と続いていた。男女間での違いは「セックスの際に避妊を意識しなくて済む」を優先するのと「避妊効果が高い」を優先するのとの違いであり、男性は副効用については全く無関心であったといえよう。　さらに、2 年前の毎日新聞社調査との違いは、副効用が少なくなって、避妊を意識しなくて済むが上昇していたことであった。これはメディアからの情報がピル承認時より少なくなって副効用の認識が減少し避妊薬としてのみ捉えることとなったと考える。

F1　性　別：男　性

		問３４－１　使いたい理由									
		避妊効果が高い	手軽に使える	低用量だから副作用が少ない	女性自身の意思で使うことが出来る	セックスの際に避妊を意識しない	人工妊娠中絶をしないですむ	多くの国で使われている実績がある	月経痛の緩和などの副効用がある	この中にはない	不明
	合計	32.3	9.4	5.2	31.3	44.8	21.9	6.3	1.0	0.0	1.0
F2　年　齢	20歳未満	37.5	12.5	0.0	37.5	0.0	62.5	0.0	0.0	0.0	0.0
	20～24歳	18.2	9.1	0.0	18.2	72.7	18.2	18.2	0.0	0.0	0.0
	25～29歳	40.0	13.3	0.0	40.0	33.3	6.7	0.0	0.0	0.0	6.7
	30～34歳	35.7	14.3	7.1	28.6	35.7	35.7	0.0	0.0	0.0	0.0
	35～39歳	35.3	11.8	11.8	23.5	41.2	11.8	5.9	5.9	0.0	0.0
	40～44歳	27.8	5.6	5.6	38.9	50.0	22.2	11.1	0.0	0.0	0.0
	45歳以上	30.8	0.0	7.7	30.8	69.2	15.4	7.7	0.0	0.0	0.0

F1　性　別：女　性

		問３４－１　使いたい理由									
		避妊効果が高い	手軽に使える	低用量だから副作用が少ない	女性自身の意思で使うことが出来る	セックスの際に避妊を意識しない	人工妊娠中絶をしないですむ	多くの国で使われている実績がある	月経痛の緩和などの副効用がある	この中にはない	不明
	合計	43.6	15.8	6.8	30.8	28.6	19.5	0.8	15.0	1.5	1.5
F2　年　齢	20歳未満	53.3	13.3	13.3	20.0	20.0	20.0	0.0	0.0	6.7	0.0
	20～24歳	33.3	8.3	12.5	45.8	20.8	25.0	0.0	16.7	0.0	0.0
	25～29歳	50.0	12.5	6.3	31.3	18.8	12.5	6.3	25.0	0.0	6.3
	30～34歳	36.4	4.5	4.5	22.7	36.4	18.2	0.0	22.7	0.0	4.5
	35～39歳	50.0	20.0	5.0	25.0	20.0	10.0	0.0	30.0	5.0	0.0
	40～44歳	37.5	31.3	6.3	37.5	43.8	18.8	0.0	6.3	0.0	0.0
	45歳以上	50.0	25.0	0.0	30.0	40.0	30.0	0.0	0.0	0.0	0.0

使用したくない理由には、男性は「副作用が心配」74.0%、「女性だけに負担がかかる」28.9%、「情報が入手できない」14.0%、「既に使っている避妊法で十分」12.0%の順であり、女性は「副作用が心配」69.4%、「毎日飲まなければならないのは面倒」19.9%、「女性だけに負担がかかる」13.1%、「既に使っている避妊法で十分」11.0%、「情報が入手できない」10.6%、「もらう前の検査・診察が面倒」9.9%の順で、男性より、より当事者的意識で判断されていることが示されていた。また、毎日新聞社調査との違いは殆どなく、「副作用に対する心配」はやや低くなってきているような傾向が窺われた。

低用量ピルに関しては、ピルが使用されるようになって 3 年を経過しているが、未だ 7 割の女性が使用したくないと考えており、その使用したくない理由の 7 割が副作用によるものであった。その他として 2 割の女性は毎日服用することへの危惧を抱いていることが明らかとなった。

低用量ピルの普及に際しては、副作用のイメージを払拭し、女性自らの意思で選択でき、しかも確実な避妊効果がもたらされ、セックス時に避妊を意識することなく、副効用もあわせてピルの理解が深まるとピル普及は進展するものと考える。そこには、ピル、イコール、避妊というメッセージより、ピルの副効用などを通しての女性の健康管理に繋がるという啓発活動が是非とも必要と考える。

【全員の方】

(35) 人工妊娠中絶について（○は１つ）

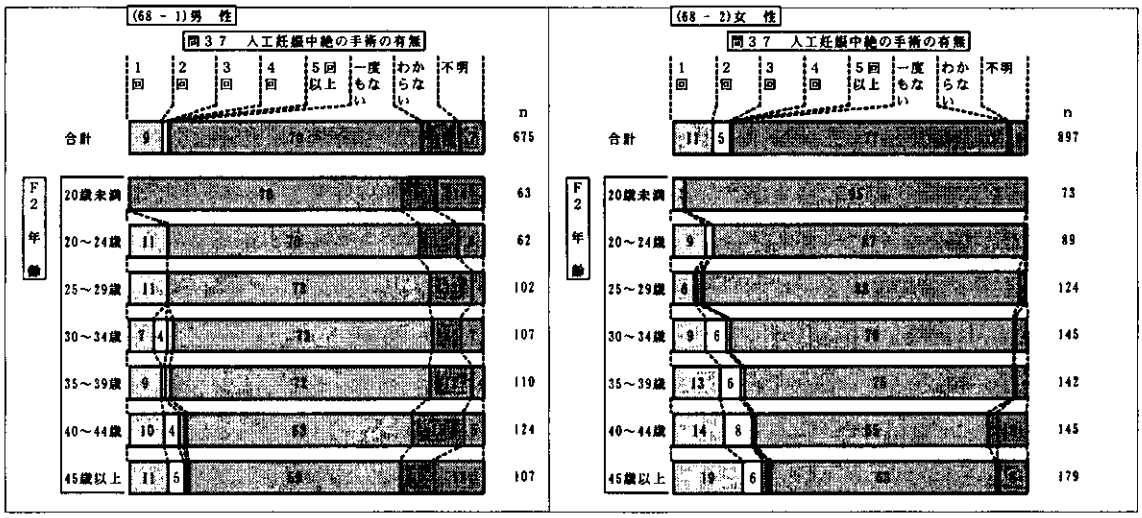
男女ともに人工妊娠中絶を容認しようとする姿勢が目立つ。「一定条件の場合は、やむを得ない」との回答が、男性 56.0%、女性 63.9%と、女性で目立った。「認めない」との意見を明らかにして男性 8.1%、女性 4.2%となっているが、中でも、「20 歳未満」の男女での中絶否定派が多い（男性 14.3%、女性 11.0%）のは、他の年齢層に比べて、「中絶体験」がないからだろうか。一方、容認派が概して高年齢に多いことは、自らの人工妊娠中絶経験がある結果だろうか。

(36)　中絶しようかどうかを考えている時に、誰かが責任をもって赤ちゃんを育ててくれるとしたら、あなたは産むか（産むことを支持するか）

男性の 26.8%、女性の 23.5%が「産む（産むことを支持する）」と回答し、おしなべて各年齢層で同様な割合となっていることが興味深い。中絶せざるを得ない背景には、「産みたいけれども養育能力がない」「経済的にゆとりがない」などがあるのだろうが、この結果からは、これらの問題が解消されるならば「産みたい」という意識があることを知ることができた。

(37) あなた（あるいはあなたの相手）は人工妊娠中絶の手術を受けたことがあるか（○は1つ）

人工妊娠中絶の経験者は、897名の女性のうち154(17.2%)名が経験しており、そのうち2回以上の複数回は51(33.1%)名であった。年代別では10歳代2.7%、20歳代前半11.2%、20歳代後半8.1%、30歳代前半15.2%、30歳代後半20.4%、40歳代前半22.8%、40歳代後半26.8%と年代を重ねるにつれその頻度は上昇し、2回以上の複数回も3割以上が経験していた。これは毎日新聞社人口問題調査会（2000年）の調査（既婚女性の25%が経験者、複数回経験率は23%）に比べて、経験率は低いものの、複数回経験率が高いという結果となった。中絶を一度経験すると、避妊の最終手段として中絶を捉えてしまう傾向があるのだろうか。



(37-1,2) あなた（あるいは、あなたの相手）が、最初の人工妊娠中絶手術を受けることを決めた理由とその時の気持ち

中絶を選択せざるを得ない理由として、「結婚していないので、産めない」という理由が36.4%であり、また、「経済的な余裕がない」という理由が19.5%と、特に若い年代に多く未婚であるがゆえの社会的経済的規範を踏まえ中絶を選択していることが明らかとなった。

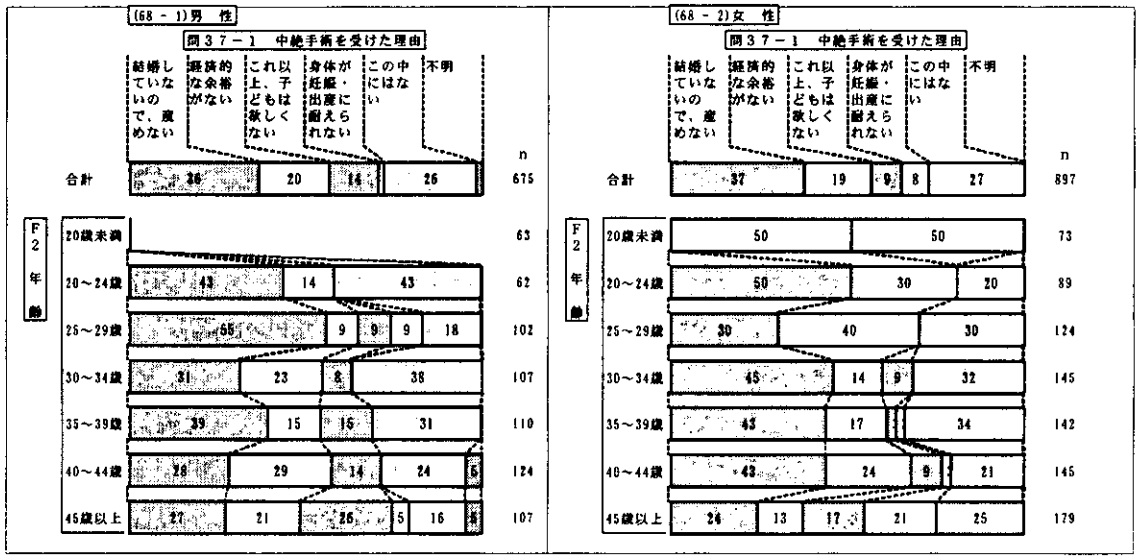
また、彼女らの中絶に対する気持ちが「胎児に対して申し訳ない気持ち」を抱くのが、いずれの年代をとおしても殆ど同じであるが71.4%と最も高く、「自分を責める気持ち」と考え込むのが43.5%とこれも各年代に共通しており、性交後の結果に対して望まないことが生じたら自責の念に駆られながら未婚の性として中絶を選択し自分の人生に必要な選択として考えているのが、年代が高い女性に多いと窺われた。その結果によりセックスを回避するトラウマが起こっていることも明らかとなった。このような予期しない事態を招く以前の予防的措置としての確実な避妊法選択への行動を図って欲しいものだ。

興味深いのは、「中絶を受けた理由」として「結婚していないので、産めない」「経済的な余裕がない」「これ以上、子どもは欲しくない」「身体が妊娠・出産に耐えられない」の選択肢を用意したが、男性の26.2%、女性の26.6%が「この中にはない」と回答しているこ

とだ。どのような理由があるのか、個別面接などを通して確認したいものだ。

(37-3) 最初の人工妊娠中絶手術を受けた医療施設での出来事（○はいくつでも）

この回答は人工妊娠中絶を受けたことのある女性だけに向けられた設問であるが、72.1%が「この中にはない」と答えている。「性行動を非難された」「診察室や診察の仕方に、プライバシー等に対する配慮がなかった」「医療機関で人間的な温かみのない対応を受けた」とかなり否定的な選択肢がおかれていたためだろうか。たとえば、「やさしかった」とか「おもいやりのある態度で接しられた」等の回答が用意されるべきだったのだろうか。もちろん、「人間的な温かみのない対応を受けた」と回答した女性が13.%いたことも看過できない事実である。医療従事者への警告として受け止めよう。



(37-4) 最初の人工妊娠中絶手術を受けた後の状態（○は２つまで）

「セックスする気になれなかった」(39.6%)、「相手に対して嫌悪感を持った」(14.3%)、「無気力になった」(14.3%)、「眠れなくなった」(9.7%)、などネガティブな回答もあるが、中には「ほっとした」と9.1%が回答し、「特に何も変化はなかった」(12.3%) などもあった。ここでも「この中にはない」との回答が20.8%と多くを占めていた。年齢でみると、若い世代で上述したネガティブな感情に襲われているが、「人工妊娠中絶手術」の経験からまださほど時間が経過していないからなのだろうか。この質問だけからは、これらの感情や症状がどれくらいの期間続いたのか、程度は時間と共に少なくなっていったのかなどは明らかにはできないが、中絶後のトラウマに悩まされることがないように、性交開始の早期より確実な避妊法選択ができるように学習を積んで欲しいものだ。また、このようなネガティブな感情が起こらないような、中絶前後の十分なカウンセリングがなされるように、中絶実施施設に期待したい。